

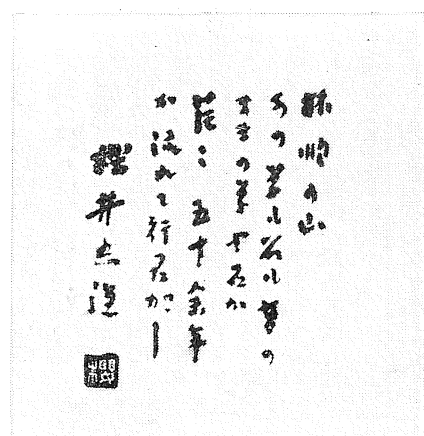
「隨想」項羽の死

柳田義一

われらの悲願であつた物故諸先輩の供養塔の除幕式に臨み僧侶の読經中ふと僕の頭に浮かんだのは中国科学院々長郭沫若氏の歴史小品「項羽」の死の一節であつた。

突然西北の方から怒濤の押し寄せようなざわめきの声が聞えて来た。それは一面に入り乱れた馬の足音である。この馬蹄の波はついに長江のほとりまで打ち寄せて来た。人も馬も視野の中に入った。全部で二十七騎、いづれ劣らぬ凛々しい勇士

たちである。黒い兜をいただき黒い鎧を身につけ、左手に銃房の飾りのついた長い矛をもち虎のかしらの模様をついた銅の盾をもっている。中にひととき目立つのは、黒い駿馬に跨った体軀堂々たる偉丈夫である。身の丈七尺、頬には二ヶ所の傷があり二筋の黒い血のかたまりが連日の悪戦苦斗と敗戦の惨めさを物語っている。この偉丈夫とは誰れあろう、力山を抜き、氣世を蓋う万夫不当のますらお、楚の項羽である。彼は劉邦



旅順の山
あの草も石も昔の
ままの草や石か
茫々五十年
が流れて行ったが—
桜井忠温
(肉弾著者
陸軍少将)

—漢王に追われ追われ長江のほとりまでやと逃げのびて来たのだ。たの。更に之に筆をつづかせて、

兵馬ともに疲れては、長江を渡るにすべもなく進退ここに窮つた。この時、計らずも入江の中から突然一艘の小舟が漕ぎ寄つて来た。項羽の方を指さし、之に乗って逃げよと叫ぶ。この小舟は僅かにひとり馬一頭しかのせることしか出来ない有様である。項羽は断然手を振り「ノー」と応え、重傷にうめいている側近の臣「鍾將軍」に勧め愛馬スィを附けて乗船させ遁れさせた。

沈着の項羽は止つて他の二十五騎とともに哀れ壮烈な戦死を遂げる。

この稿に至り郭沫若氏は独自の解釈からこの小舟を漕ぎ寄せて来た男をしてこう語らせているのだ。「われわれは秦の始皇帝の暴政に耐え兼ねて秦の統治を覆がえして—と考えた。さればこそ民意に従うことのできた項王は遂に天下の共鳴を勝ち得たのだ。人々は生命をも惜しまずに項王に馳せて援助し擁護し続けた。而して念願の秦の暴政を覆えした功績は今尚史上に明かである。しかし之は誰の力であつたか君達は今でも項羽という超人的な一個の英雄の力で出来たと考えてはならないものが潜んでいる。実は項王は余りにも急速に大成功を収めた為にわれとわが心にひとつの幻想をもち自分ひとりの山を抜き世を蓋う力をもって

秦を亡ぼしたのだと過信したのではなからうか。

力の過信から余りにも民意をないがしろにし、民に背いた政治を行つて却つて民心の離反を招いたと思う。然かも自ら之に気がつかず何等政治に体験のない側近の武人輩どもの献策のみを取り入れて暴力的な武断政治を行つたことに因を来すと云うも過言ではあるまい。東西を問わず自分の権勢だけを念頭に置いて庶民の死活を心がけない者は必然的に自滅の一路を辿る運命となる。項羽がその最も著しい鑑であると思う。

郭沫若氏は尚云う「人の最も恐ろしいことは自分でその過失に気がつかないことが禍する。されば早く気がつけば救う方法も見つかるものだ」と最後に「今も悠々三千年興亡の歴史をのせて流れる、淡々たる長江の水量は、ささやいているかのようだ。君達は今のうちにその驕慢な心、自分の所在ばかりを考えている心をうちすてよ、而してわが流れのふところに来たれ、いっしょに大声挙げ生命の讃歌を歌おうではないか……と筆を結んでいるところに何か深いものを感じる。 四三・四・二夕

億土の歡喜は潮に乗る送り火

義一

鈴木商店の思い出

麗洞・藤田東山 (旧名東水)

大蔵鈴木商店の解散後四十年を経過した今日も多士済々として各方面に御活躍のその基礎は大黒柱のお家さん鈴木よね女史、総支配人金子直吉氏達の御薫陶であつたことは等し

く同感の事と信じます。
小生は西も東も判らぬ二十三才の若年で鈴木商店に憧れ、大正六年三月より大正九年十二月まで四年間鈴木商店に勤務させて頂き、県外生活

小唄に出てくる「たつみ」 下元健吉 (田屋商店)

羽織や お江戸のほこりもの
八幡鐘が なるわいな

辰巳の左棹

私は性来小唄が好きで十数年師匠について習つて来た。最近日曜日の毎日放送名人会審査員芝寅のお師匠さんからも一度出演しては、とお誘いもあるが、とても未熟であるので一寸戸惑っている。去る六月二十三日(日曜日)尼ヶ崎荘で小唄「ゆかた会」(主催小桜会)の舞台で箕輪心中、上り下りに出して貰つて好評を博したことが嬉しい。小唄の歌詞に「たつみ」の文句があるものを二、三、拾ひ出して見るとこんなものがある。

辰巳
たつみゃ よいとこ すあしが
あるく

おみきがきいた エいとエ
きそう すあしの 意地っぱり
あつしゃ 辰巳の 左づま

の橋頭堡を作り今日あるを得た事を忘却致しません。鈴木商店在勤中のいろいろの事は「たつみ」の記事を連想して皆さんそれぞれの御感想がある事と思います。

小生は会計課の勤務で主任の日野氏の温情の下に机を並べた同僚に柳田義一氏、賀集益蔵氏、松井元氏其他十数名がおりました。柳田さんは柳田常務の御曹子ですが高ぶらず時々冗談を飛ばして、アミダ籤の金ツバで共に舌鼓を打った事も覚えています。柳田さん今日の天気はどうでしょうかと尋ねると「サアふりそうな天気ではないでしょう」とザットこんな調子、晴曇雨をうまく使い分けた所謂どっちでも使えるうまい表現「たつみ」の随想がこの時から芽生えていたでしょう。店の食堂は相当広かった。支配人から見習員迄上下の差別なく大きな飯櫃から食べ放題、店の気風も上から下まで良い方々ばかりで民主的で和氣霽々であつた。保健の為に山岳部があつて、六甲や須磨の山々に連れられた事もあつた。山頂を征服して大阪湾や紀州半島淡路島などの美景を遠望した気持は爽快で明日のエネルギーの源にもなった。少し事務に馴れた時で

あつた。東京に出張を命ぜられた。それは手形を東京支店に運ぶ役で任務は重大である。自分をこんなに信用してくれたのかと嬉しかった。短時間の余裕があつたので宮城前二重橋附近日比谷公園など歩いて日本一の東京を見たのもこの時が生れて始めてであつた。小生の宿舎は須磨の山腹松翠園で、元外人の所有した屋敷とか準洋館で庭は芝生が広く青々と、眼下に須磨の海を眺め幾隻かの帆船が行き交う姿は絵の如く風光明媚な処、海水浴、砂浜の散歩も楽しかったが、須磨へ来て神戸名物の南京虫の攻撃から逃れて安眠が出来たのは何よりであつた。山伝いに須磨公園に遊びに行つて深夜自分の足音に驚いて身内がゾクゾクした事もあった。

この松翠園の西隣地続きに苺畑があつて、実つた苺を二、三人で失敬したらそれは金子さんの畑であつて爺やに見付かつたが別に怒られもせず笑つておつたので却つて恥しくて反省して失敬は止めた事もあつた。

金子さんの事に就て、大正八、九年頃
鯨鯨の口の干上る年の暮
を作られたと承りました。風刺か実

六月二十六日 NHK教育テレビ「百年の潮流」 「第一次世界大戦と経済発展」

高畑誠一 会長の放送より



テレビに出た金子翁の写真

御承知の通り日英同盟で、日本から品物を持ってくるば何も彼も非常によく売れると、日本の工業でこしらえたものはどの製品もいくらかでも売れる。非常にぼろもつけしたと、運賃も御承知の通りの非常に高くなっている。なんといったって、又金子さんの工業成金ですたらずとも商売の思案に、このくわしい事は金子さんから私がロンドンにおった時分に、私にあって大正六年十一月一日付きの長い手紙があります。これに金子さんが当時の抱負を充分もうらしてありますので、先生の全盛時代の計画を全部書いてありました。その一部分の面白い所を読んでみたいと思います。余り長いのでその中の最も面白い最後の方を読んでみますと、即ちこの戦乱の変遷を利用し大儲けを為し三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎。是鈴木商店全員の理想とする所也。小生共是が為め生命を五年や十年早く縮小するも更に厭う所にあらず。要は成功如何にありと考え日々奮戦罷在り恐らくは独乙皇帝カイゼルと雖も小生程働き居らざるべしと自任し居るのであります。そういう金子さんの非常な積極政策に鈴木商店がこれに対応しまして、ロンドンの店でも大いにこれに競争して大手の商売を、ロンドンに関するかぎり儲けてより成績をあげたわけなんでありましたが、不幸にして鈴木商店は非常な借金を負いまして、その金利に倒れたというのが残念に思いますが、しかし金子さんの事業は残って今日の日本の為になつておると思いますが、それがなにかとなくさみになつておると思います。

景が判らないが総支配人といえれば日常多忙であるのに、英雄閑日月ありとはこの事かと思つた。金子さんは一日三時間眠ればよい、随時随所で眠る主義ときき精力絶倫に驚いた。金子さんと日野さんは一の谷のお住い、小生は須磨の松翠園故時折店の帰りに金子さんの自動車に便乗させて貰うことがあったが車中でも眠ておられる事があった。或時車中で小生が日野さんに、計算が合わないことを話していたら、その時眠っていると計り思っている金子さんが、それはどうした訳か算盤違いではないか、と言われたことがあった。眠っていて人の言葉が判るなんて偉い方だと思つた。

お家さんの事に就て、鈴木商店に勤務中は目にかかることはあつてもお話しすることはあまり隔りがあつて出来ないが、店員の旁りについては常に心を使われておられる様でした。小生が参謀本部に勤務中、昭和十一、二年頃と思いますが金沢、

福井方面に出張を命ぜられた時、二等(今の一等)の旅費の給与を受けているので二等車に乗車した処車内には老、若の婦人と小生と三人丈けであつた。老婦人は各駅毎に駅名をメモしておりましたが一、二ヶ所見落したか、小生の側に若婦人が来て聞かれたので小生は旅行案内を見て教えたのですがその時これから神戸へ行くとの事、小生も神戸の鈴木商店に勤務した事など話したら私がその鈴木だと言われたので始めてお家さんと御寮人さんと判っているいろいろお世話になったお札など改めて申し上げた事があつた。そのお家さんは昭和十三年に御他界になられた趣ですが思えばこれがお別れであつてあの時の車中の情景が浮び出されます。お家さんは和歌が御堪能故旅行しても駅名等をメモして歌作の材料にせられたのではないかと思います。本年は明治百年に相当する為め各地でも多彩な行事が展開せられつつあります。小生も未熟ながら詩作致しました。

明治百年
維新、改革、覚人、眠り
聖代、榮仁、一百年
英傑、済々、扶聖、主
国光、照世、日東、天

編集からのお願ひ

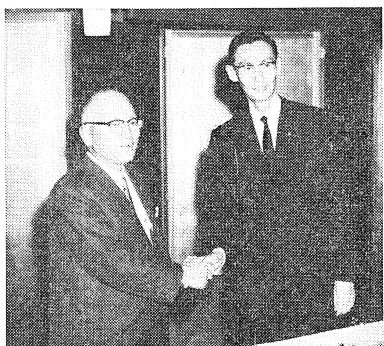
明春五月鈴木商店支配人西川文蔵氏の五十回忌に当りますので同氏の追悼随筆を次号迄に多数御寄稿下さい。西川日商社長の御了解を得て法要も営まして頂くつもりをしております。何卒よろしく。(Y)

〔東京辰巳会より〕

日商・岩井合併に際して

日商・西川社長

先程幹事の鈴木さんから辰巳会慰霊塔の事につきまして、それから又柳田さんから木畑さんからも非常なお世話になつた慰霊塔が見事に完成しまして鈴木縁につながるお互が非常にうれしく思っている次第でございますが、ああいうふうな立派なものが出るにあたりまして、いろいろとどう云うふうなその表現すべきかと云う事で、特に関西の会員の方々が真剣に御検討になつてその碑文も出来たわけでございますが、その中に鈴木がその蹶跌したとか破綻したとか云う様な言葉はつかいたく



岩井氏(右)と握手する筆者

ないと、皆さん御同感でございましょうが私もなんとか他にいい言葉がないかという事を考えておつたのですが、皆さんの気持ちの一致するところ、まあそう云う事よりもむしろ鈴木が日本の経済の栄光の座を去つたと云うふうな表現がどうかだろうか、随分すつたもんだやりましたかね、最後にどうになりましたかな、半年以上ももんだ様でしたが、まあいづれにしても栄光の座を去ると云う事まことにこれも残念至極であつたので、皆さん心から涙を飲まれた時代であつたと思ひますがその栄光の鈴木が世界の貿易界、経済界に華々しくうって出て栄光の座を持ち続けておつたと、しかしそれが去らざるを得ない段階になつたと、城山三郎君がいみじくも「ねずみ」の中にいろいろな表現を持つてそのいきさつを書いておられますが、いづれにしても結論的にはああいう事になつて四散の有無をたどつたわけでございます。

その栄光その夢ももう一度という気概は皆さんの心の中にも絶えず今の意気地として残つておると思いますが、私もあの瞬間から日商創立以來絶えず心の隅にこれを育てて來たのであります。数年前の日商の第二次三ヶ年計画の中にそう云つた意味合いを披露したわけで当時新聞記者から大分いろんな批判もつけセンセイションと云いますかうけたわけがあります。

皆さんの非常な御協力又先輩又同僚並びに後に続く諸君の一体となつた総力が、ここに結集されて少くともまあ貿易界で日商ありと云う事でまず第一次大戦、その後第二次大戦の直後、直前までは日本で第十位に位しておつた日商でございますが、まあようやく最近第七位までのし上つて來たわけでありまして。しかし第七位と云う事になりますと、日本の経済界でいろいろな行事が行われましてまず第二次的に考えられる、いかに残念だと、われわれ鈴木にああいった華やかな世界に生きた時代を思ふと思ふだけ、非常にこのままじゃ残念だと云う事で、まず第五位五本の指に入れようと云う事を目標してまあ今日まで來たのであります。

す。

その後だんだんとこの世界的な情勢も又国内的な情勢が知りたければ、それだけで現実でいけばいいと云う考え方もあります。ところが、私もそれにあきたらずなんとか五番、出來れば三番出來れば一番と云う所へ夢を托してやつておる次第でございます。生意氣な事はまあ云わない方がいいのでございましょうが、まあ少くとも、ここで岩井産業と合併致しました結果は、五位になるわけでございます。しかし問題はこれからでございます。これにはひろく各地で、又各方面で御活躍になつております皆さん方の、陰に陽に直接間接の非常に力強い御鞭撻、御指導を切に願ひする次第でございます。何事もよろしくお願い致します。

この五ヶ年計画であえて合併も辞せずという表現をした以前からではございますが、特にその直後から、私と致しましては口だけじゃ何もならんという事で現実に社内盛りの上りを又それにはどういった方法がいかにと、いろいろこの合併もあれば責任もあり、系列の経験もあり、いろいろとございましょうが結局相当地なところと合併しなければそう簡単